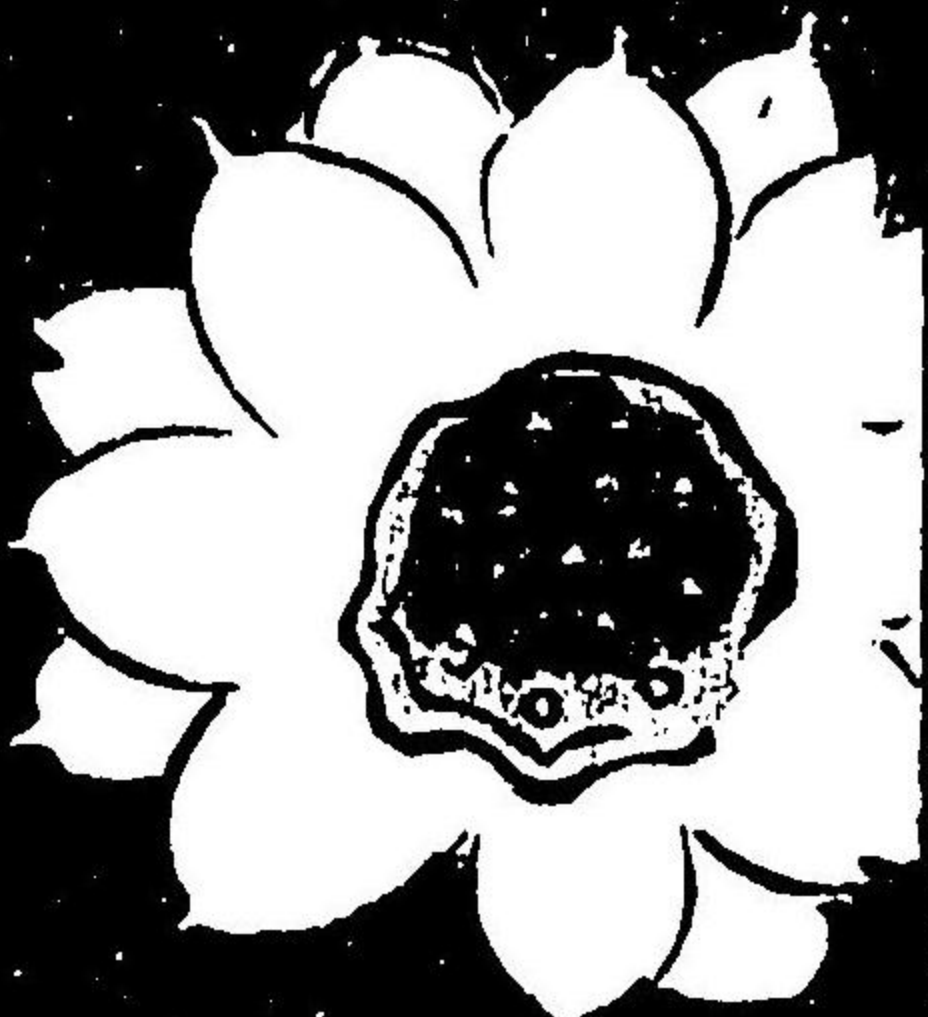


41  
972

新訂 倭文庫 釋迦八相



第三編  
上巻

花笠文京著

# 釋迦八相

也来と

文

庫



斯文堂  
梓

真書釋迦八相倭文庫第三編之序

支那の稗史水滸傳を讀て南總里見八犬傳を作り出と、如きの所謂換骨奪体とて譬の支那の事實を日本に換へ日本の語談を支那に當箱め骨を換へ体と奪ふて巧く看官の眼を瞞すなど己自ら一部の趣向を産出すより猶爲難く博學多才の人非ざるよりは誰か亦之を能せんとい己耳が博學多才なりと言ぬ計の馬琴が大言成程換骨奪体の六ツからさ物に違あるまい其爲難き事为好で爲し無益の業に腦髓を惱さんより寧の事ぶちまけ話が淡泊してよいではないりと書肆の主人に勸し乘氣の早合點只りな文字を漢字に書換へ當世風の合巻調に綴直す氣樂な加役の懈怠生よ打て付賣るか堂たり發兌て見給へと初編二編と發兌しよ旨く時好に箱つたやら次編をくと御催促の的は外さぬ大吉市三編廻て烟草にせむ次編も續て出版致せば幾末永く御愛讀の程一重に二重に願ひます

花笠文京 記

夢亭在矣原著  
花笠文京重訂

釋迦八相

也来と

文

庫



斯文堂

梓

重訂釋迦八相倭文庫第三編之序

支那の稗史水滸傳を讀て南總里見八犬傳を作り出し、如きハ所謂換骨奪体  
として譬ハ支那の事實を日本ハ換へ日本の話談を支那ハ當箱め骨を換へ体を  
奪ふて巧ハ看官の眼を瞞すなど己自ら一部の趣向を産出すより猶爲難く博  
學多才の人ハ非ざるよりは誰カ亦之を能せんとい己耳が博學多才なりと言  
ぬ計の馬琴が大言成程換骨奪体ハ六ツかとしき物ハ違あるまい其爲難き事を  
好で爲し無益の業ハ腦髓を惱さんより寧の事おちまけ話が淡泊してよいで  
はないりと書肆の主人ハ勸ハ乘氣の早合點只りな文字を漢字ハ書換へ當世  
風の合巻調ハ綴直す氣樂な加役ハ懶怠生ハ打て付賣るか堂たり發兌て見  
給へと初編二編と發兌し旨く時好ハ箱つたやら次編をくと御催促の的  
は外さぬ大吉利市三編廻て烟草よせき次編も續て出版致せば幾末永く御愛  
讀の程一重ハ二重ハ願ひます

花笠文京記



新編 古今 撰 寫

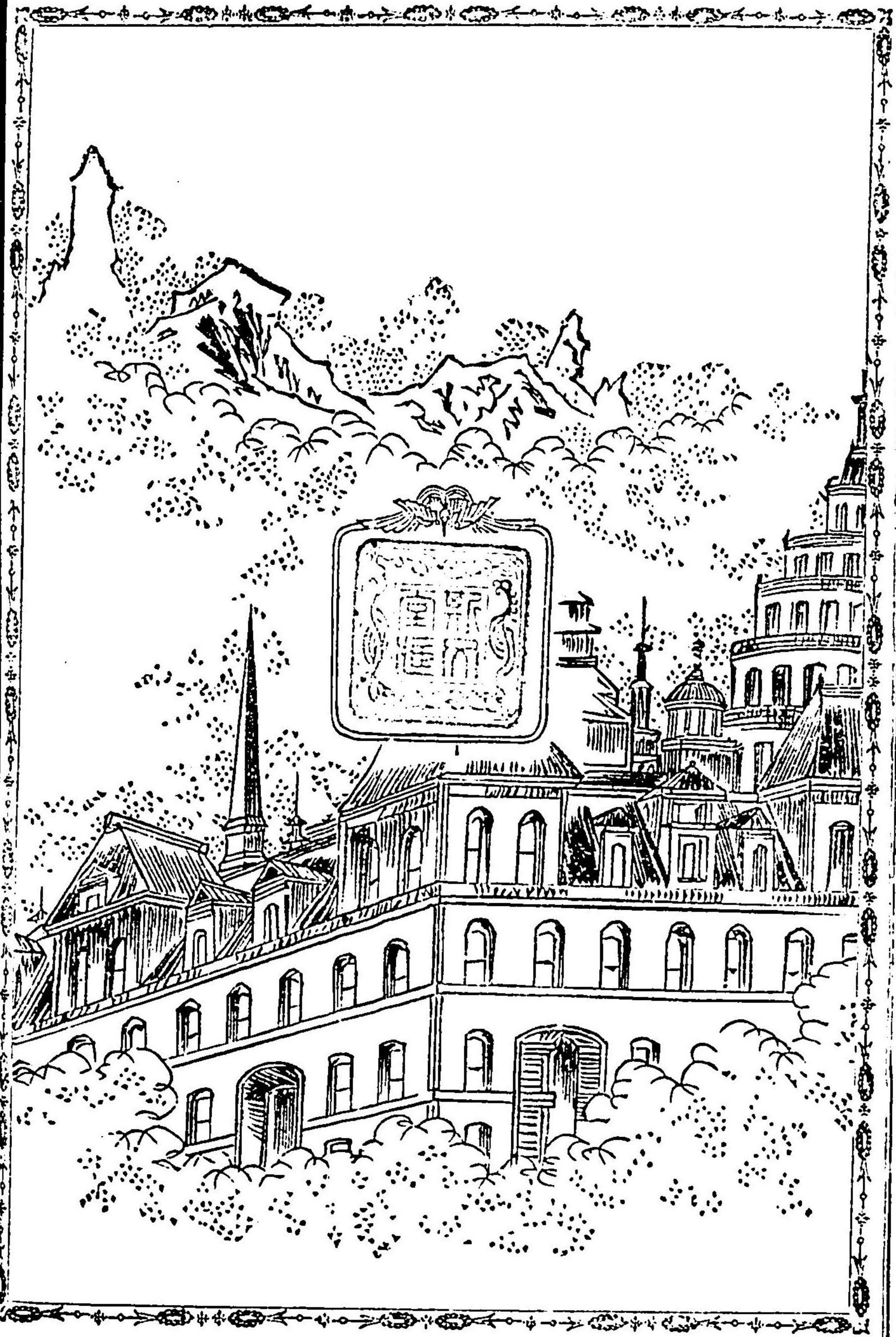


優陀夷大臣



優陀夷の  
女房

悉達  
太子



眞書 釋迦八相倭文庫三編上之巻

第五回

仇野の悪魔太子を惱す

東都

萬亭

應賀原著

花笠

文京重訂

去程又太子之戀園非の門前なる寶塔の傍側又休々ひつゝ母摩耶夫人の菩提を弔ふんとする氣根も疲れぬつゝか寢れ一面相を我と我身又心付き誰も語らふ人としてあく心細げ又伏沈み嘆きこまいて在せし又遙の彼首へ提灯の來るも痛くうち驚ろ涙を袖拭ひつゝ稍起上りて潜り門の扉をいとも密やのし押へ開き一身の僥倖と欣びあがら密と入て踏む敷石の音のして耳もや立んと心づき爪立つ足又芝生を踏みまめひとく一玄關の潜戸を明け内を覗けり常よりも物密の深々と静まり居るぞ折よと猶は差足して上りつゝ居間の坐敷へ入て見ればとや行燈も眠れる如く幽又點きて寂寞又心はそくも御安坐在ま一ホツと一息吐き給ふも尚を絶やらぬ涙をり登下太子のつくくと獨り柔じ在まそやう我身從來心を碎き母の菩提を弔らんと件んの淫肆へ夜毎お通ひ翌の夜こそ正眞の佛と拜ませんと長の約束たれども貯へ一黄金の是まゑも残らず消て失ありぬ指こけ先

眞書 釋迦八相倭文庫三編上之巻

の如何して黄金を携さへ行くべきやと種々工夫しさまひが稍あつて御心も密に思ひめとやうの  
 過し頃僧ごもの夫とぞく語をける此院の本尊ある左の片側安置せし佛の南天竺の東に當る南  
 清國の辰巳の神山の室をば蓮花臺といふその蓮花臺の坐王如来の佛形を東利天の帝釋が親ら  
 圓布陀金を以て造りたるを今此の院に連綿と傳へあると聞けば心さその此の金佛人靜まて折も  
 よいと佛間をさして潜びゆくを優陀夷の女房のト問れ中も堪へて始終の様子を窺ひ居ると  
 の露さるる太子の程なく尊像を携へ戻り坐す就て幼稚心の一と筋も母への孝行何の右もあれ此の  
 佛体の金なるか但一の土くと短刀もて丁々々と斬掛し不思議や裡より金色の光明輝やき四方を  
 拂ひ白晝を欺む計りある折ありあれ優陀夷の女房侍女を一同へ殘し襦袢脱きすて氣色を變て  
 走り出つゝ涙と共に又ふり上たまふ太子の短刀を持たまひ一手を無手と捉ゆれば太子の駭ろさ回  
 顧り懇々と御覽じて「誰のと思へば優陀夷の女房のゝる深夜は何用ありてこの院へ來りぞ仔細  
 ぞあふん疾く語れ如何よくとお尋ねあるより女房のかん膝元へ進み寄つゝ聲曇らせ「オ、御不  
 審の御尤も卑妻の當院へ参りたるの开も太子の學問修行此程の如何に在ますやもか我儘など  
 遊ばして尙未熟も在いなば鬱頭闌との遠慮なく嚴しく叱り敷へてよと事々しく母上より仰

せ越れ一の表向誠のなれも習ひなまのぬ君の起居現時の不順の夜寒も一と方ならず父君のか案ト  
 といひ轡曇彌の方又私共其他の未々までも此院へ移らせられ其夜より今ごろの如何あうばせ  
 一の馴ぬ御身の憂さ辛さを案じ申して夜の目も合を余りの辛さ私一が轡曇彌の方へ願ひ帝  
 へも此由委しく申上げ太子のかん顔拜せんと心いろく當院へ來りて見れば开も什麼も打て變  
 じ鬱頭闌の空かろろしき物語り諭へん方なきかん舉動如何なる天魔が魅入てか世も淺狹き徒  
 淫事傾城街といふ仇な文字も見るさへいと思ひさ尊とさかん身も顧みたまらず夜あく通  
 とせかん年も似氣なく卑しき傾城も肌觸られれん顔色の變れこといと恨み泣詞も涙も口籠  
 る太子の始終を聞給ひ胸を貫く劍より思ひ苦しきその諫言何の免もあれその心とまづ宥めれ共  
 上まで深き思案もなさはやと思ひ召つゝ幼稚なるたん手まで泣き崩折れ女房が脊撫で摩り詞  
 を和らげ「喃優陀夷の妻何事も磨がたんと悪い程も過まつた堪忍いやさず憎かろう宥してたもど  
 宣まぞすれば女房のハツと計り起直り太子を膝も抱きあげ「エ、何を御意あるべます貴君が  
 お可憐なればこそ勿体なくも左や右といふても甲斐なき振分髪のみまぐ八ツ九ツのかん年まで此世  
 を去られ一摩耶夫人を誠の母君と迷ひたまひて其の亡跡をいたいけ深く弔ふ給ふをさへ惡様

又曰やいて何とぞ獲  
 心を禁めまゐらせ万  
 乗の御位も即んども是  
 まで種々よか諫め申  
 せし情あや今のし  
 も其心よ百倍劣り  
 一かん舉動もとや天  
 下萬民の思とく是が  
 天子の若君と何に面  
 目も宮中へ今更かん  
 供ふるべきや是と申  
 そも此の年來傳育て  
 申せし此乳母がわ



ゆへよ  
 罪もあ  
 き太子  
 の御名  
 を汚し  
 する其  
 越度の  
 言譯よ  
 自か  
 果しと  
 言せん  
 爲よ今

此處にて妾が自害いたそべし假令五障三從の  
 戒めある女子ありともやはか男も劣るべき此  
 身の爰まで死するとも一念の魂魄は太子の影  
 身も添奉まつり附纏ひとる天魔鬼神を拂ひ退  
 て是非とも十全の御位も即けまゐらせ帝を  
 とじめ橋邊彌の方ろの外わや一の末々までも  
 國土安穩御世長久と喜び諸人を草葉の陰から  
 今見る如く嬉しけれども此まゝ爰で最期を遂  
 ての二世と契ひし我夫も再び逢ふ瀬も之を  
 まゝ恐れおがら太子よ  
 り優陀夷へ何とぞお傳  
 へ下され只一つのか願  
 誰も知る通り宮中お



釋迦万経巻之八

在る倅聚特のうもく如何ある因縁や生得愚痴よしてまだ幼稚かといふ云もの、我が名をさへも覺えぬ身ゆへ心ふ心を付て育てて育てよとそ人並の物よして太子へ忠義の美名を揚げさせ身をも家をも興させて果敢なく果し母が名も世に美しくう呼れあは千部萬部の經陀羅も増さる功德も候らふぞ最期の願ひ只是の偏よとん告げ下された一卑妾の最早是までなり若君去らばと言も何へぞ有合ふ太子の短刀を取る手もとやく肌をくつろげ既又咽喉を刺んとする覺悟決め一有様太子の駭き取継り一喃女房ソリヤ物も狂ひ一コレ喃待てと忙て止むる彼方の一と問は最前より様子を窺ふ鬱頭蘭の斯くと見るより走り出で懐劍むづともぎ取れば女房よりも太子の狼狽「お師匠さま面目な一磨ふそ死かねば適いぬ身跡懇切も吊らひたまたれと言つ、鬱頭蘭が取放ちて持る懐劍も絶り付き我と我が咽元へ突立んとまたまふを鬱頭蘭漸やく刃を隠し「御心急くのか道理なれば是まで御身の放埒も何かな様子あるべきなり仔細を具し語りたまへと云ハ太子の早速の挨拶「オ、磨が放埒のその仔細具し語り聞さんが最前より心惑ひれて苦しさま、彼なる一と問もて氣を休め委しく語り聞かそべいと一と問の裡へ入たまふ緒又優陀夷の該夜変妻の歸りの遅かるを心許なく思ひ一かば從者僅か召連つ、伽比羅城を出て鬱頭蘭の玄關へ来て案内を乞ひ云々と言入れば早く

も通じて女房のまをけありふり見せますと形作りつ甲斐なく侍女連て出迎へ「オ、優陀夷とのよい處へ先づ此方へと先お立ち以前の坐敷へ伴あへば鬱頭蘭も會釋終り「儲太子の簡様くのとよて賤き御身の舉動と語る幸き聞く悲しさ優陀夷の一層呆れ果てまば一言葉もあうりしが稍あつて喘息と吐き「シテ若宮の何處に在すやと問ハ女房ひと問ハ指さし「彼ある内よと聞よりも優陀夷の堰立ち取あへす襖開いて入ふんとすると鬱頭蘭まばしと押し止め「心急の道理かれと是の深き仔細のあると暫く此處に待たまへ程あく此へ出たまうとも痛く叱りなごまたまひで何事も穩便に當院と還御ささし御引取下さるやう此鬱頭蘭が分ての懇願必らまお違變下さるかと御内儀へも先の程申し談じて置たれば足下も此義と心得たまへと言れて優陀夷の打ち黙頭き「御坊の仰至極せり去るが若君の何事の在りてり餘りの暇取り殊又一と問の寂寞として音もあさふそ心得ねコレ女房迅く御様子と窺ひ見よ餘り夜更ぬ其間お御供して立歸ふんと指揮の下女房の襖の脇へ立超つ、「若宮夫も在ますの若宮さま」と呼ぶ答のあさひ不思議と夫婦もろとも問の襖とわけて驚愕箇の什麼太子の影だよ見えさまの姿彼首此首の隅々に見廻す傍も捨られし扇子の開きてありたるを手燭も隣りて見てわれは最も優しき假名文字よて書記一とる筆の痕優陀夷のやがて



取上て  
 ○人よ  
 騙され  
 正眞の  
 佛をい  
 かで拜  
 せんと  
 一そじよ淫肆の街へ通ひかれ肌身の  
 汚し申さねと尊とさ父のかん名を汚  
 一最早宮中へ歸るべき身よあらぞ殊  
 よ奉加の賽錢を盗み取り其上佛体と  
 乃よ掛し是みる母への孝といへど  
 何の因果で淺臺よ罪造るる回向して



我ゆる母君の倚や  
 暗き闇より闇又迷  
 ひたまそん其言譯  
 よの潔よく腹切て  
 冥土へ赴き母の手  
 づから打擲かれお  
 叱り受ても奈落の  
 底へ魁けあして母  
 の苛責のおん身代  
 お立んど思へど乃  
 物いもぎ取られて  
 詮術なし爰で死あ  
 れぬ身よーあゝ○



○れ 争い 存 居 生 ぶ べ 只 上 御 能 執 成 くれ

よかト書遣され一扇子の文言優陀夷ハ駭然と心も轉倒「イヤ女房狼狽るコリヤ斯してハ居られぬ處ろ此の障子の明放してあるを思へハ彼所より忍び出させ給ひしハ相違ありと心漫ハ追立てバ女房ハ又遺念の扇子つくく〜と見て身ハ添つ「様子もまろ左や右と御異見一たが勿体ない許して給ひれ若宮と打伏し歎き生体もなき居る處へ辭頭蘭も様子と聞付け走り出で「是ハまた御夫婦とも歎いて居るまろ處もあつた此の庭口の外ハ是れ即ち仇し野のひと筋道とやく跡より追着て太子の御最期と止めたまへ率疾々と追き立れば道理と夫婦ハ身づくろひ優陀夷ハ股立とりあへ庭へひふりと飛下て「女房急げと追き立られ心得ま〜と襦衣を端折もあへ本夫ハ續てハそかま〜く外面へ出しこる鬱頭蘭内より聲と掛け「此の闇夜ハ提灯を持し萬事ハ不便さふんと心付れば優陀夷ハ答へて「イヤ提灯あつてハ若宮よとやく我々と知ふるべ〜殊ハ世間へ内々なればと言捨て急ぐ表の方優陀夷ハ伴せし足輕一人來り着つ、箇ハ旦那何事の候ふふと言ハ優陀夷ハ詞忙しく「オ、よい處へ來り〜其方ハ申し付るハ此院ハ居る年長たる番僧を取逃さぬやう殿〜く細りけ縛めたくべ〜詮議ハすすと敷々あれば必ふまぬのるな外ハ又ハ申し付るハ夜明ぬうち伽比羅城より太子御迎のお乗輿を密にお取寄せおかけよか〜是等の事決して他へ漏さぬやうハ心得〜

るり急げ〜と立別れ夫婦連立ち行くと雖とも何れを的途ハ跡追ふべき折も折とて眞の闇一ト足先も見ね分ぬハ廣き野原を何方か辱ね初んと心とり〜女房ハとや涙組み西の方より廻らん〜と云ハ優陀夷ハ頭を掉り「イヤ〜東より行くべ〜と手を取り草を踏分つ、急ぐに連て女房ハ驚ろき「怖怖や〜アレ〜〜彼處ハ光るハ若〜太子の此世を早く去り賜ひ〜亡き魂あてハ坐さぬ〜「イヤあれハ人魂でハありあれこそ世ハ謂ハ狐火あてさ〜〜怖いものでハない斯るとり〜ら爾ハかりの不吉三昧言まもあれ早〜〜と誘へども妻ハ有繋ハ女氣の心後れて立どまり「ア、持病の癪ガ此胸先へアレ〜〜喃苦〜や堪がたやもう一步も歩まれぬ痛や〜と道傍の千草の上ハ伏轉べハ優陀夷ハ聲を荒らげて「イヤ愛ハ肝甲斐な〜め若〜此の間ハ太子の御身ハ萬一の事あるあつバ夫婦とも〜何に面さげて宮中へ復ハ歸らるべき何せ死さぬハあらぬ命氣を確手と持て來よと無理と知りつ、詞で叱り心で勞ハる優陀夷より一層辛き女房ハ病ハ勝れず唯々返辭の内ハウンと計り仰天に反て引入たり優陀夷ハ忙て、抱起し呼べと答のあらバころ傍ハ立越之流の水を手ハ結びつ、獨り言「現ハこの流水の起源ハ雪山の寶嶺に續くと聞ハ諸佛諸菩薩力を添へ此水ハ奇特と現ハし妻の病苦を助けたまへと一急疑〜て口より口ハ含ませれば佛の利益ハ難有や誠

の一心通下らん女房の眼と開き「ア、有難や諸々の佛菩薩が今あり〜と現出て宜まふふの明覺  
 無爲の太子と雖も夥多の外道が附纏ひ修業を妨げ或のまた死神と變じて災ひ〜諸佛守護と雖も  
 かん身の上いと危険し急ぎて助けまゐらせよと教えられ〜と不思議を語れば優陀夷のたいお力を  
 得て「去らば未だ太子のおん身別段恙のあらまか〜アナ嬉しや喜ば〜や寸時も迅く尋ね出さん  
 此仇し野の内より外およもや赴きたまふまじイザや急がんで去らばとて夫婦互に願みあひ甲首乙首  
 と尋ねゆく心配りぞ切なりなる去る程お悉達太子と辯頭蘭の院を潛び出で踏みも習ひぬ平原の内  
 其處よ此處よと痛の〜や最期處お彷彿と流石此世の名残りお父君お心引され休らふ暇もなく涙優  
 陀夷夫婦と幾回か袖摺違へ〜情なやこのよの縁の暗黒に夫どのゑらで西へ行き優陀夷の東お人影  
 と馳付き見れば口惜や枯〜尾花お招かれ〜と又た立戻る西の方太子の怪しお人影と東へ恐ぶ摺合  
 お躡づく石も縁の端と云ふ俚諺さへあるものを餘りといへば腹立〜や五更の天の北斗さへ光氣を  
 失なふ曇雲の雨も落來るとがりなる空物とささ有様お女房の優陀夷の袖を引止め「コレ申しこの  
 やうに幾回同下道を甲首へ行き乙首へ來つ搜ね廻るお今迄も逢ぬといふも不測お事而して折々  
 人影のやうなるものお摺違ふて漫心お戰慄とする氣持のともふんすがアレの儘お徒らお狐か狸で

ふんせう夫おまゝ天合の次第は悪うなつて來る氣の濟ぬと澤山あり如何は御佛のお告ありとい  
 つと悪い辻占ばかり若や太子のお身の上は過誤のありのせぬかと思へ〜モウ卑妾の生て居る空の  
 ふんせぬと云ふ聲さへも曇らせて袖は涙を押し拭へば優陀夷の急な留めつ、「また愚痴ばかり言出  
 して何ぐお付て泣たがる去らば今回の手分〜其許と私が右左を廻りて尋ねる程なら見通〜の  
 よもあるまじ尙や夫おても逢ずんば是非に及ばぬ兼ての覺悟二人の命を仇〜野の仇となすとも怨  
 のあらじ去らばとばかり諸共西と東へ別れつ〜心に佛の御名を唱へ道を分てぞ尋ねゆく夫婦が  
 忠義の眞實心哀れとも切なりともいふさへ中々恐なり話頭兩岐太子の尙や甲首乙首と仇〜野の露  
 となる身を迷〜が只ある樹陰は冬枯たる薄尾花のう〜の中に誰の亡跡の標に夥多の石碑あれ〜  
 て並立たるを御覽じて爰ぞよき吾が最期の場所と既にお覺悟ま〜ませども死ぬべき仕方御存〜  
 なく「ハチごう〜たら死なる〜が左やせん右やと今更に又〜屈托の涙と共に打伏て暫〜思按に暮  
 けるの稍ありて上を御覽じ「オ、死ぬよきもの見付〜がわれなる柳の下た枝に腰の細帯結び下  
 げ夫へか〜りて相果んと紐をとく〜兩手に捧げ伸上りつ又た飛着て掛んとすれど丈足らす紐の  
 外れて掛らねばま〜く知恵を廻ら〜たまい傍にある手頃の石を軟弱と腕に二つ三つ漸やくに積



み重ぬ夫へ上れり柳の梢に思ふがまゝも手の届けをアナ傭  
 やと細紐を結つけて一ト息吐き今が現世の告別父上母様輪  
 曼彌様先立つ不孝を許させたまへ又た二つにの優陀夷夫婦心  
 を竭して此年まで傳てくれたる禮も言はず嘸う今頃の淺ましき不所存者うと怨んでぬやらうが迎  
 も汚れた身よりあれは宮中への歸られず今此の原で死果て鳥や獸の餌食となり身の罪障と滅すべ  
 一方々さらば南無阿彌陀佛と言ひ際飛降り送れんとまたまふ折から左右より來る人音も見認められ  
 トと佇立たるまゝ呼吸を疑へ遣過さんと待ちたまふ優陀夷と女房の別れて又た會ひ黑白なき間夜

又透し見て「うちや女房」オ、優陀夷どの是程まで尋ねても絶て姿も見わたまはず頼みの綱も断果たれと卑妻や覺悟を極めまゝた傍の石も腰打ち掛け生体なまだ瀧きりて眼も當られぬ痛のいと優陀夷も共は不覺の涙稍やうき拂ひ聲泣ませ「如何もく筒程も心を竭しても還近ざる上うらの豫ての覺悟と極むべし去あがら宮中又遣しをく悴慙特が事思ひ出せば痛のく年齒も行ぬ幼稚兒を獨り寝させてるのまゝ別れ果あばその跡で局々の者共も親のなき子と侮むられ翫られ疎まれ辛き身の立ち行く方もなくあり其時よはさぐや嘸酷き親じやと嘲つ様の今眼前に見る如く悲しくも又痛まゝからせや太子様の在さぬ上の是はつくりの氣も掛ると子と思ひぬる親心女房の尙や女氣のいと涙ふりき暮て「アノの様事モウ云て下さるお卑妻や尙更女子じやもの疾も知て居たけれどお前に云たら放氣者悴どころのことでいと叱られやううと思つたゆゑ獨り心で苦悔くと泣てをつくり居りまゝたホンコ浮世の俚諺お持べきものの子といへど今此身の生中一人の悴のあるゆゑお黄泉の障碍とありますと語る折うら櫻頭蘭院の時を報せる明六の鐘女房の聞耳立て「はくく悔みても甲斐なきと夫婦が最期を今爰で覺悟の言葉を優陀夷の押しめ「イヤ始めより今迄も借老の契の結びしお愛おて兩人相果てり世間の者の口の端に徒淫

事の情死を言觸るるが口惜し「イエく卑妻の二世の縁死を一所と心の内に堅く誓ひいとあれ人の何とも言ひいへどうでも來世の同じ蓮花と死期と語らふ折もあれ一番鴉は啼き渡れば優陀夷の天を見上つ「最早夜明け程あるまじ日の出と告る鴉啼吉事よ近き今の辻占なんと女房ア聞たうといふ間も啼きゆく鴉の聲女房も氣を取直し「オ、さうでんすと云つ、天を仰上る塗炭石の臺坐よ立ちまふ太子を見認めまだ暗きお夫といえらる優陀夷も向ひ「コレ爰よ石は地藏は辱けなくも立たせたまふ聞及ぶ地藏菩薩の幼兒を守護る佛ありとか太子のお命恙なく未だ現世に在まざるその現在を守らせたまへ若しとや現世を去たまひ後世をひとへも助けたまへ南無地藏大菩薩救世の誓を現にしたまへと心深く念じつ「優陀夷どのも拜みたまへと勧められて威儀を正し夫婦諸共手を合せ涙と共に唱ふるやう「南無衆生消念必得往生知るべし本性重ければ消念するもの皆生ると太子へ向ひて南無阿彌陀佛々々々々と繰回し深くも誓を掛らるゝを太子の始終を聞よりも優陀夷夫婦懐くや我を助くる誓願を我へ向つて頼むとい如何に知ぬとあがれ餘も果敢き聞路の迷ひいつそ宣名て出たらば兩名の命も助くふんヤレ懐かや優陀夷夫婦太子なるぞと云んとせ「ア、否々斯く淺ましき身は罪障覺悟一なごら今更に告名の恩は

至なり愛着心に牽れての後世の成佛ならぬと聞く爰ぞ大切に處なりと口の中よて今生れ告別と曰  
まふ程に有繫深き思愛を止る苦しさ胸先へ刃れとくよ突來る涙を呑込みく震ふ身を震とせも  
せず堪忍び目を閉たまへハ幽ふも夫婦が姿は見へねども情るや生増よ太子くとうち嘆くは聲  
耳に入るもれうら聞くは堪へのね止め兼ね堪へく溜涙閉る眼臉は堰止めびたく思とすたら  
くと蹴れ散り優陀夷夫婦の顔へ掛けバ女房と打ち驚き「ア一疎まーや今とあり雨の落て來たさ  
うか大降のせぬ其先よモウ一とたび念晴し又廻つて見やうぢやんせぬりと顔は掛り涙の雨を  
夫とはえらむ拭く優陀夷も己が涙の雨の乾き兼てり太子の涙又たやつたりと降り掛るるの一粒の  
千尋の海の深きに勝る相互の思ひ顔に晴間ありなり恚りし程又夫婦の者雨の大降せぬうち  
もと眼前あるを見殺す跡の哀れも知らぬが佛打連れ急ぐ夫婦の跡を太子の見送りく「ア一我  
ながら愚の嘆イザヤ最期と兩手を合せ願意只功德平等一切發菩提心往生安樂國南無阿彌陀佛々々  
々々々々と句を繼ぎ以前の紐に掛り石を後へ蹴返しあづら閃りと飛ハ痛ハ一や僅よ九才を一期と  
して現世の息の絶よりり〇還りての夜明も遅くまた暗きに鐘を力にうち鳴ハ墓場くを回向する  
寒念佛の僧とくと口ハ唱名途絶なく此の處へ來掛りしが不圖片側と透し見て「ハテ朝あく

巡れどもついで爰に見馴るるアノ佛の立姿見落すやう未熟者修行愚ありくドレく回向の  
たさんと傍へ立寄りつくく見て「ヤアこりや佛ぢやかい幼兒の縊首ぢや後世のみ助くるが出家  
の役り現在の尙更の事助けて見んと石へ乗り細紐解て抱下し身体を探ればまだ暖温この幸いと大  
音よて幼兒よのふくと幾回も蘇呼く抱きすくめて口ハ吹込む此世の風太子の佛と息吹きくへ  
しかん眼を開き四方を見て「ア、情や又も此世へ復りくと宣まふうちよ優陀夷夫婦の彼の出  
家の幼兒くと呼ぶ高聲を遙か聞付け若や夫りと忙たしく夫婦もろとも馳來り只見れば出家は  
抱きたる小兒の正しく太子ありヤレ嬉しや辱けあやかん身恙なくまませしくと女房のとやくも  
抱き取り悲み涙忽ち嬉し涙どふりくとる優陀夷は件は修行者又わりし様子を打聞て「箇ハ辱け  
あき御坊は厚情かん名の何と曰まふと問ハ出家の答ふるやう「イヤ我等の家を捨て身を棄て只  
雲水よまかざる修行者の事よ一われハ名告も甲斐なき業あらめ人を助くるハ出家の役親戚のもの  
なら幸ひなり勤りたまへと言捨て思よも着せするがまよ笠を取上げ鐘うち鳴見返りもせず別  
れゆく跡を優陀夷の見送りて「いのよも尊とさ僧の形容名とさへ言はぬ美しくさイヤ喃女房爰ハ  
先刻も腰掛の地藏菩薩の前なれど地藏の更見へたまはず偕ハ太子と見違いかいりよ暗夜されバ

とて然といまらず白々と後世を頼み一思さよ其折あどて御名をバ告りて夫婦の千辛萬苦を休めて  
 の給いらざり、と勸りながら怨み啣てバ太子も今更思ひ堪かね「ノウ夫婦の者その怨の現も道  
 理去りあぶら忍び潛れて死あうと一も深き願のある故ぞモウ何れも言てくれあ磨の過ると宣  
 まふよず夫婦のハツと恐れ入り「コハ勿体やや餘の事と思おむ怨み申しまいさア」還御ま  
 一ませと夫婦の是より慰さめ申一御世繼する下心女房の迅速の口調子又浮れて子傳諸優陀夷の  
 囉す雨こんくも拍子板さる可笑さ又皆々笑ふ紛れつ、昨夜の難義又引換て荒野の道も苦みなら  
 ず既又其の夜もまららと明渡りさる山桂空の迷ひの雲晴て日輪東又輝けバ夫婦の御壽命長久と  
 喜悅の眉開きてバ太子又侍づき鬱頭蘭の院へと道を急ぎなる去る程又鬱頭蘭の院にて優陀夷が  
 殘せ一彼の足輕一人の番僧へ繩をかけ堅く縛め繫ぎあき且太子かんに迎ひの橋子の準備も整へて優  
 陀夷の歸り遅かるの如何も心許あしと不審の晴ず起つ居つ野面あがめて待ちわびたる折から以  
 前の庭口より太子密に還御の様子と窺ひ漸くは心安堵さ扣ゆる足輕尙ほ繩付を守り居る稍わつ  
 て女房の姿と改ため太子又侍づき端近く立出れば本夫優陀夷の威儀正しく先立つ、玄關の障子  
 さらりと押開き漂々しく立出で大音よ「ヤア」誰かある兼て申一付置一繩付の僧を是へ引けと

詞鏡とく呼立ればハツと答へて足輕共りの繩付を取圍み太子出御の玄關前よいとも嚴しく引据た  
 り優陀夷の惡僧をどつとと睨付け一汝番僧承まされ過つる頃悉達太子此の院へ移らせ給ひしより  
 解飯王の一子提婆達多先頃小弓の勝負あ負るるを無念と思ひ其の遺恨を報とんそのさめよ己を犬  
 又入置てあるもあふぬ惡事と勸め太子の學問を妨たげて大切ある千金の御身をよくも汚させ奉  
 まつり一抑々淨飯王の解飯王の兄君よして辱けなくも今萬乘の御位お在まし給ふ君の御子悉達  
 太子と提婆との則ち從弟同志の續さ合ひ是等の事も辨知あがは是迄の汝が不始末吾れ隠し目付を  
 以て詳細よ之れを知る最早隠しても隠されまじ直眞直巧み一惡事を白狀して刃を受よ迎も許さ  
 ぬ汝の生命去あぶら當院の佛の圖よて果るとい惡人よの似ず冥加あ奴めと刀すけりと抜放りの  
 眼前へ突付つ、「サア此の刀よて引導せん疾く白狀せよ覺悟の如何よと突付られても惡僧の更よ  
 動ざる氣色なく冷笑ひつ答ふるやう」を、聞及ぶ優陀夷とやうの汝よてありつるう斯く露顯よ及  
 ふ上の何との包まん我なとバ汝達も豫てやまらん摩偈國の北山よ住む寶生妙玄と云ふ者よて十六  
 魔界百種の外道七道濕鬼を手下としてあらゆる魔術妖法を行ふひ天變不思議を働らく身おれい假  
 令百筋千筋の細目よ掛れいとして怯みいせねと事露顯る、今までの太子と首尾よく往生させ此處を

逃れ去り提婆が辭  
へ立越ていよく

太子の小氣味よー

我と我が身を果と

やう工夫を

凝して死る



たりと言誇らんと思ひよあふ  
腹立ーや残念や命冥加な悉達太子



再び見ゆるあそ口惜けれと太子を  
平と睨付れば優陀夷の堪へず刀と振わ  
げ首うち落さんとなしけるを太子の聲

掛けおし止め徐々と立出たまひ「イヤ優陀夷の怒の至極道  
理去あがら院の園にて人を殺め佛場を汚さんと磨が心に適の  
ねばまづ〜此場の助けてよと言つ、傍へ立寄て自うら縛め  
を解たまふ慈悲の程あり難有りれ優陀夷の駭き太子よ對ひ



「箇の難有き君の  
おん慈悲去あがら  
是等の如き大悪人  
を殺せばとて聊う



以て罪ならず却て夥多の人を助くる大善根あり申さん左さくべ天下千萬の人を惱まし募りての  
 竟にこの世を己がまにく魔界となさんも計り難のり助けかゞき奴からを許させたまへと言  
 へ老又た振上る其手を押へ太子の悪僧又打向ひ此の後陀度謹みて悪事を思ひ止まるべしと猶や種  
 々ぞ教え諭し又優陀夷おも詞を盡して其心と宥め給ひ竟に繩を解放ちたまへと優陀夷も今の詮術  
 むくまべし傍も扣へたり其時悪僧の忽ち大地を踏抜く計り又跳り上りて優陀夷に向ひ「ヤア小  
 賢き及三味思ひ知らさん是れ見よと天へ向ひく印を結び口又咒文を唱ふれば俄に震動夥たしく甲  
 首乙首も黒雲の渦巻き下る其中おぼらゆる悪魔悪鬼神外道の眷屬異形の怪物數多く現れ出で太  
 子を始め優陀夷等を挫いごと近寄るを優陀夷の憶せせ立向ふ侍女其他の供奉の恐れ一同ぞく  
 みぬる就中有驚の優陀夷の女房襦ろきあげて甲斐くしく太子を抱き院の内へ入れまねらせんと  
 する其程に優陀夷が扱たる獅子王の劍の奇特お悪魔外道の怖れて竟お辟易し寶生妙云を雲も載て  
 摩遏國の北山さして引退く跡は優陀夷と切齒をなす「アラ口惜や悪魔ども太子の深き恵も奪され  
 取逃せしう残念なり思へば憎き提婆どの此上ども片時も油斷のあらぬの太子のおん身先づ左も  
 右も當院を還御なさしめ奉つらんと夫々の者を呼集ふるよ以前の騒擾は氣後れして皆々隠れ居る

りしが優陀夷も忙しく呼立られて恐るく出て供奉をありまなる恠て優陀夷の爵頭剛お逢て懇切  
 一禮を述べ太子を御轎子へ移しまひらせ還御なさしめ奉つらんと申し上り何故か太子の左右  
 の答詞かく御顔襟お差入れたまひ歎きたまへる御化粧女房の不審の眉を擡めおん膝下へ進み寄て  
 「是のあたり若君さままたかむづり遊ばす少も早う還御ましく父君へ御對面殊もお嬉し  
 い等なるよお悲しいとの聞えませぬと柔かよ諫め奉まつれば太子の泣顔押隠し見せじとすれど尙  
 は洩るゝ涙を拂とせ玉ひつゝ「イヤ喃女房父君へおん目も掛るの嬉しけれと當院へ移りて學問  
 の仕違はずよおき人に騙されてあられもいと仕出來して不義放埒の名を求め奉加賽錢を盗み取  
 り或の佛像を刀も掛けかたぐもつて面目あく生甲斐もなき此身もて父君の云ふ迄もかく夥多の  
 殿上殿下の者へ今更顔と合せんとのいと耻かしく疎まじさ夫が悲しく覺ゆると又おん顔を差入て  
 打泣たまふを女房の現よか道理どの思ひるがら左ならぬ体もて又言やう「是の又異なとをお悔み  
 遊ばすわけなき夫等の事も御心から求めたまひ淫奔あらねば偽り人の罪とこそおれ聊くも  
 君のおん身も係りりとよ侍らす假令神佛の尊像を汚したまひとて又知るゝめさぬとの  
 是非もかゝ殊も幼稚いおん身おれは神も佛も免したまふめ爰とよく聞分たまひて御心やすく

思おもいめせア、譯わけもなや若君わかぎみさま疾々とくくとく還御くわんぎよあそませと非ひを理りま枉まる方便ほうべんも時ときも取とりて善ぜんの綱つなやう  
く賺ずかし拵こしへてかん橋かひらひ子こへ移うつし參まゐらせ夫々それぞれの者もの附屬つけぞひて列れつを亂みださす還御くわんぎよわれは女房にようぼうの爵頭しやくづら園えんへ  
始終しじうの挨拶あいさつ述終じゆつり太子たいしの跡あとより身繕みつくろひて侍女じしよ下供げきやうを引連ひきつれつ、歸かへる途とちう中ちゆうも左ひだりや右みぎと太子たいしの心こころ  
を配くまり宮中きゆうちゆうのおん首尾しゆびも我われれ先まづ歸かへり帝みかどの前まへよいなお執成てりかひ置おざれば何なにうも付つけて不都合ふつがうあらんと心こころ  
利りさる下僕しもべの者ものは近道ちかみちを案内あんないさせ太子たいしよりも先立さきだてんと伽比羅城かひらじやうをさして急いそぎ行ゆく

釋迦八相倭文庫三篇上之卷終

